

二〇二四年三月二五日

播磨灘沈む夕日の朧なる
杖の妻気遣ふ夫や花の坂
由緒読む春雨傘を傾けて
隈笹をこぼれ落ちたる残り雪
保護者席からもあひ和す卒業歌
啓蟄や木屑と見しは亀の首

二〇二四年三月二四日

桜餅食む川風の床几かな
花下に笑むきものギャルらの一屯
倒木はベンチともなり百千鳥
幕末の戦場はここ花堤
手庇に朝日刎ねつつ青き踏む
大の字の火床抱きて山笑ふ

二〇二四年三月二三日

散歩人犬と揃ひの春ベスト
春障子庭木の影の機嫌よし
思ひ馳す実りの姿剪定す
老ひ母の春愁を受けとめにけり
ギャラリ―は古りし土蔵雛飾る
花椿一枝影置く火灯窓
群鳩のくぐもるる声や芽木の森
病む母のベッド移動す薔薇の窓

二〇二四年三月二二日

鈴の緒の美しき岩戸春社
思はざる身の災ひに春愁ふ

きよえ
なつき
なつき
愛正
むべ
ぼんこ

あひる
あひる
澄子
せいじ
かえる
もとこ

満天
千鶴
わかば
むべ
なつき
澄子
千鶴
みきお

明日香
わかば

春陰に閉じて久しき古水門
雨晴れてより艶めける春の山
集落に夕刻知らず鐘朧

二〇二四年三月二一日

ふらここは漕がずに内緒話かな
門灯に燃えたつ寒緋桜かな
水底に揺らぐ日の斑は水草影

二〇二四年三月一〇日

寺の鐘間遠に響く朧かな
ぽこぽこと蓄玉なす利休梅
海風の吹き上げ通ふ花菜畑
卒園証書掲げママへと突進す
銃眼を覗けば頬に春の風
春時雨傘もて客を追ひかけぬ
春とともに来たる富山の葉売り

二〇二四年三月九日

術後の身外湯に癒やし春を待つ
陶器雛九谷大皿屏風とす
芽柳の揺るるを待ちて自撮りの娘
畑帽子搔つ攫ひたる春疾風

むべ
康子
みきお

かえる
むべ
澄子

澄子
明日香
智恵子
あひる
康子
うつぎ
千鶴

やよい
なつき
明日香
千鶴

毎日会みぬる選・二〇二四年三月一七日